

現代詩 入門

関根 弘 著

飯塚書店



現代詩入門

1961年5月15日発行

¥ 200

著者との申
合せにより
検印廃止

著者	関根弘
発行者	飯塚広
印刷所	赤城印刷KK

発行所 東京都豊島区 飯塚書店
駒込6ノ847

TEL(982)2089 振替東京13014

現代詩入門

関根弘著

詩論からの影響……………	九五
新鮮なイメージの保存……………	一〇八
中期の技術的問題……………	一一八
他ジャンルのなかの詩……………	一三〇
詩が書けなくなった時……………	一三四
詩の方法の模索……………	一四〇
社会的問題への関心……………	一五一
他作品の批評と自分の詩論……………	一六六

詩壇——現代詩の歩み——

「荒地」グループ……………	一八〇
「列島」グループ……………	一八一

現代詩の誕生	一八三
浪漫派の周辺	一八四
象徴派の周辺	一八九
口語詩の時代へ	一九四
民衆詩派とプロレタリア詩	一九四
むすび	一九六
あとがき	一九七
索引	

詩の魅力と作詩の技術

詩の魅力にふれる日

詩とはなんだろうとかんがえないうちから、ひとは詩のなかにいる。子どものコトバはそのままで詩だといわれる。かたことで、子どもが話しているとき、大人が想像もつかないようないきいきした現実をつたえることがある。

子どもは、「風がブランコに乗っている」というようなことをいう。それは、子供がみた通りのことをいっているだけなので、すぐれた観察でも発見でもないわけだが、大人はなんて面白い、うまいことをいうのだろうと感心する。「風がブランコに乗る」などというのは、大人の認識からすれば、およそナンセンスなのである。

知識の整理ダンスに体験を分類するようになると、とたんに子どもはつまらなくなる。知識の宝庫は、生きる知恵を与えるかわりに、環境表現のいきいきしたコトバを子どもから奪いとるからである。

詩は問いであって答えではないともいわれる。心の状態だけをもんだいにする。一種の謎かけ遊びといってもいい。ジャン・コクトーの有名な「耳」は、

私の耳は貝のから

海の響をなつかしむ

(堀口大学訳)

と書かれている。これは散文的に書けば、自分の耳は、海の響をなつかしむから、貝のからみたいなものだ、ということになるわけである。しかし、ここでは、

私の耳は貝のから

どうして？　と思わせるところがミソである。「風がブランコに乗っている」というのも一種の問いであって、答えではない。だから詩的なのだといえる。

大きくなると、そんなふうには外界と接触しなくなる。常識を身につける。常識はいちいちひ

とを感動させない。それならば、詩は非常識なものなのか？ という質問ができてきそうだが、それに対する答はアトまわしにしてさきへ進もう。

子どもはさきにもいったように、意識せずして詩のなかにいる。だから、詩の魅力というものがわかってはいない。わたくしたちが詩の魅力にはんとうにふれるのは、思春期、春の目醒めを経験するところだ。子どもから大人になろうとするとき、経験する精神的苦痛、その精神的苦痛の似姿をわたしたちは詩のなかにはじめてみいだす。

わたしも、島崎藤村の「千曲川旅情の歌」を少年時代に愛誦した。

小諸なる古城のほとり

雲白く遊子悲しむ

緑なす繁^{はとべ}葉は萌えず

若草も籍^しくによしなし

しろがねの衾^{ふすま}の岡辺

日に溶けて淡雪流る

これほどうまくわたしの心の状態を表現してくれたものはないと思った。

緑なす繁^{はこべ}葉は萌えず
若草も籍^しくによしなし

というような言葉やいいまわしは、まだよく理解できていなかったのだが、七五調のところよいリズムに甘く心をゆすぶられた。佐藤春夫の「水辺月夜の歌」も、このころのわたしの心にしみ透った。

せつなき恋をするゆゑに
月かげさむく身にぞ沁む。
もののあはれを知るゆゑに
水のひかりぞなげかるる。
身をうたかたとおもふとも
うたかたならじわが思ひ。
げにいやしかるわれながら

うれひは清し君ゆゑに。

恋のなにものであるかを知らないうちから恋を恋した。恋とはなにか？ わからないのにわかっている。そこに詩がある。

思春期はまた、自分の将来の展望をしっかりみきわめようとする焦りの時代でもある。社会と自分の関係についてもかんがえないわけにいくなくなる。だから、自分のなかの未知数のものが、詩のなかに共感を求めるのは、ある種の無情感や恋のムードだけではない。センチメンタルなムード、甘い情感に惹かれるいっぽうで、社会あるいは現実にたいする関心の度も強くなる。

現代詩は難解だというのが、今日、いっばんの通念のようになっていくが、少年時代に出会うのが、七五のリズムのある詩だけときまってはいいない。たとえば、岡本潤の「風景」と題するつぎのような詩も、わたしにとってには生きるはげましを与えてくれた。少年はただたんにロマンチックなのではない。社会にたいする関心も深めていく。

風は手にふれないのに、

むこうで煙突のけむりが横に流れてゐる

社会が良くなるということは、誰にもかれにもきずかれていることではないが、よく注意すれば、変化は起っているのだ、社会の不幸をなくす方向に向って努力しなければいけないというようなことをこの詩を読んでわたしは感じた。煙突のけむりが横に流れているというイメージは、素晴らしい感動を惹き起した。

はじめての衝動と作品

わたしは比較的小さいときから詩を書いた。好きだったということもひとつはあったけれども、父が熱心に綴方を書いたり、詩を書いたりすることをわたしにすすめた。それがだんだん嵩じてきた。

だから、わたしの体験は誰にもあてはまらないが、いまの小学校では、五年生から詩を書かせるようにすることが望ましいということになっている。かんがえてみると、わたしが詩らしいものを書いたのも、やはり小学校五年生のときなので、体験にそくしてかんがえても特殊すぎると

いうことはないだろう。いまでも覚えているわたしの小学五年生の頃の作品は、

かさり

落葉が踊った

枝と枝の間を

陽の光が

通った

といったようなたあいもないもので、もっぱら観察に重きを置いていた。父は綴方や作文について、いろいろ指示を与えてくれたが、詩についてはよくわかっていなかった。それで、わたしの詩は、自己流であった。

いまの小学校では、詩を教えることが文部省からすすめられているし、そういう方面の教育に熱心な教師もたくさんいて、小学生が詩を書いている量は、そのとうじとは比較にならないくらい多い。けれども、宿題として詩を書かされる場合もあるので、閉口している子供たちもたくさんいるようだ。